

症 例 短 報

チョウセンアサガオ中毒；乾燥した
食用黄花菜との誤認

山本 基佳

社会医療法人財団慈泉会相澤病院救命救急センター

原稿受付日 2017年3月8日, 原稿受領日 2017年11月28日

はじめに

チョウセンアサガオは全草にベラドンナアルカロイドを含むナス科の植物である¹⁾。チョウセンアサガオの根やつぼみはゴボウやオクラなどの食用植物と誤認されることがあり、中毒を起こす例が散見される²⁾。チョウセンアサガオを摂食すると、抗コリン作用である頻脈、高血圧、頻呼吸、幻視、せん妄、散瞳、羞明、紅潮、皮膚乾燥、口渴、構音障害、腸蠕動麻痺、尿閉などの症状や徴候を呈することが知られている³⁾。今回、乾燥した黄花菜(金針菜)と間違えて枯れたチョウセンアサガオを誤食し、抗コリン性症状を呈した例を経験した。持参した草花は枯れていたが、花の形が特徴的であり、枯れていてもチョウセンアサガオだと同定され早期診断につながったため、報告する。

I 症 例

症 例：42歳，女性。

主 訴：体調不良。

背 景：中国人で日本在住2年。日本語は片言。

既往歴：特記事項なし。

現病歴：受診日前日(11月中旬)の夜、道でしなびていた草花を食用の黄花菜と思い、摘んで持ち

帰った。受診日当日の9時30分ごろ、朝食時に少量の黄花菜を食べた。10時30分ごろに嘔吐し、気分不良が続き、死んでしまうような感覚に襲われた。表現できない幻視を経験した。救急要請し15時30分ごろに当院救命救急センターへ搬送された。

消化器症状および問診上、明らかな色覚異常は認められなかった。

身体所見：血圧116/70 mmHg, 脈拍112/min, 体温37.0℃, 呼吸数30/min, SpO₂100% (room air), Glasgow Coma Scale 14 (E4V4M6), 瞳孔6.0/6.0 mm, 対光反射は両側とも減弱, 腹部圧痛なし, 皮膚は乾燥し発汗なし。

検査所見：血液・尿検査(トライエージDOA[®]を含む)では特記すべき異常所見なし。心電図上は洞性頻脈, QTc 0.458秒。

来院後経過：来院時、自宅で摂食したという乾いた草花(花は約10~15 cm)を持参しており(**Fig. 1**), これを食べてから様子がおかしいとしきりに訴えていた。中国では乾燥した黄花菜を食する習慣があり、黄花菜と思い食べたということであった。検体はすでに枯れて色褪せていたが、花の形は漏斗状であることがわかった。

来院後、血圧測定を妙に嫌がったり急に起き上がるなどの間欠的な興奮があり、表現できないという幻視を訴えた。皮膚は乾燥し発汗はなく、散瞳や頻脈を伴うなど、抗コリン性症状と思われた。これらの症状と植物との関連性から、チョウセンアサガオ

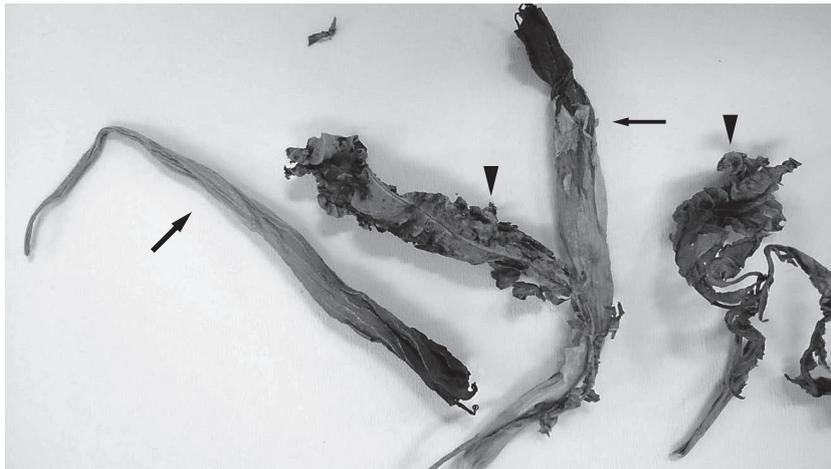


Fig. 1 the wilted *Datura*
the wilted flowers (arrows) and leaves (arrowheads)

中毒を想定し加療を開始した。推定摂取量はごく少量で、来院時は植物摂取からすでに6時間以上が経過していたため、胃洗浄は施行しなかった。クエン酸マグネシウム 34 g/250 mL に活性炭 45 g を加えた懸濁液を経口投与し、外来で経過観察することにした。植物摂取から8時間後、興奮と嘔気は軽減した。植物摂取から13時間後、脈拍 76/min, 瞳孔 5.0/5.0 mm, 対光反射は両側とも迅速であった。植物摂取から23時間後、脈拍 82/min, 瞳孔 4.5/4.5 mm で症状は消失しており、帰宅した。

II 考察

黄花菜はワスレグサ属の多年草の一種である⁴⁾。正確な和名はホンカンゾウだが、同じワスレグサ属のヤブカンゾウを指すこともある⁴⁾。原産は中国で、そのつぼみは食用の乾物に加工され、金針菜や乾燥ユリ花として販売されている。なお、ムラサキ科のワスレナグサ属は名前が似ているが、ワスレナグサ属と黄花菜のワスレグサ属とは別の植物である。

本症例で次の2点が示された。枯れたチョウセンアサガオは乾燥した黄花菜と誤認され中毒を起こし得ること。チョウセンアサガオは花の形に特徴があるので、鑑定する草花が枯れていてもチョウセンアサガオだと同定し得ること。

まず1点目に関してだが、植物の中毒は、食用植物との誤認によるものが多い⁵⁾。そのためどのような植物に誤認の可能性があるのかを熟知しておくこ

とは予防の観点から重要である。チョウセンアサガオは全草にベラドンナアルカロイドが含まれており、根はゴボウと、葉はモロヘイヤと、種はゴマと、つぼみはオクラと似ており、過去に実際に誤食され中毒を発症したという報告が散見される⁶⁾。しかし、そもそも花や葉による中毒は少なく⁷⁾、とくに乾燥した黄花菜と間違えて誤食された例は検索した範囲では認められず、新たな知見になると思われた。

次に2点目の、鑑定する検体の状態について述べる。植物を同定する際は、葉や花の形、大きさ、色などが手がかりとなるため、植物の食中毒を考えるときにはその植物を直接持参してもらうことが有用である。一方、持参された植物は適切な方法で保存されていなかったり、誤食例だと調理後であったりするなど完全な形が保たれていないことがある。本症例でも持参された植物は枯れて色褪せており、不完全な状態であった。しかしチョウセンアサガオの花は、漏斗状、トランペット状と表現される特徴的な形態をしている¹⁾⁶⁾⁸⁾。そのため本症例では枯れていてもチョウセンアサガオ類だと早期に推定することができた。検体をできるだけぎりぎり持参してもらうことで、以後の診療が容易になる。

植物の中毒の場合、患者には有毒植物であるという認識がないこともあり、具体的な情報を得ることが難しいことが多い⁵⁾。本症例は枯れたチョウセンアサガオを乾燥した黄花菜と誤認し中毒を起こしたわけであるが、これから国際化が進み、さまざまな

食文化，新たな食習慣が導入される可能性があり，今後はこれまで報告されたことのない「食用植物と有毒植物の誤認例」が増えることが予想される。本症例のような新たな誤認例の発見と集積は，今後の中毒症例の早期診断につながると思われた。

枯れたチョウセンアサガオは，乾燥した黄花菜と誤認され中毒を起し得る。また，チョウセンアサガオは花の形が特徴的なため，鑑定する草花が枯れていてもチョウセンアサガオの同定に有用であることがわかった。

〔利益相反〕

なお本論文の内容に関して，企業または団体との利益相反事項はない。

【文 献】

- 1) Rosen CS, Lechner M : Jimson-weed intoxication. *N Engl J Med* 1962 ; 267 : 448-50.
- 2) 越智元郎：チョウセンアサガオ中毒の1例. *中毒研究* 2007 ; 20 : 275-6.
- 3) Vanderhoff BT, Mosser KH : Jimson weed toxicity : Management of anticholinergic plant ingestion. *Am Fam Physician* 1992 ; 46 : 526-30.
- 4) 橋本郁三：食べられる野生植物大事典；草本・木本・シダ，新装版，柏書房，東京，2007，pp 83.
- 5) 登田美桜，畝山智香子，春日文子：過去50年間のわが国の高等植物による食中毒事例の傾向. *食衛誌* 2014 ; 55 : 55-63.
- 6) 笠原義正：有毒植物による食中毒の最近の動向と今後の課題. *食衛誌* 2010 ; 51 : 311-8.
- 7) 佐藤元昭：有毒な山野草. *食衛誌* 2011 ; 52 : 87-99.
- 8) 福田達男：チョウセンアサガオ属植物. *中毒研究* 2014 ; 27 : 10-3.

Summary

In Japan, accidental ingestion of *Datura* occurs when it is misidentified as edible plants such as burdock and okra. I report a case of *Datura* poisoning due to misidentification as edible dried daylily. A 42-year-old Chinese woman who was living in Japan presented to the emergency department six hours after ingesting flowers she had identified as edible dried daylily. One hour after ingestion, she vomited, hallucinated, and felt unwell. On examination, the patient was agitated and displayed tachy-

cardia, mydriasis, and dry skin without sweating. Although the flowers and leaves she brought with her had already wilted and lost their color, I could see the flowers' characteristic funnel shape. Considering the flowers and her symptoms, the patient was diagnosed with *Datura* poisoning. She recovered following administration of activated charcoal and a laxative, and went home 23 hours after ingestion. Wilted *Datura* can be misidentified as edible dried daylily and ingested.